

いつも口を開けている、話し方が不自然、口呼吸…

# 治そう、口腔機能発達不全症



「ことばとお口の教室」で、子どもの口の機能が不十分な病気について説明する相原さん＝大府市中央町3の大府歯科クリニックで

いつも口がポカンと開いていたり、発音や滑舌が悪かったり。食べる、話す、呼吸するといった口の機能の発達が不十分な子どもの「口腔機能発達不全症」。三年前に名前がついたばかりで、まだ認知度は低い。この病気について知ってもらい、早期発見や治療につなげようと、愛知学院大短大部歯科衛生学科（名古屋千種区）准教授の相原喜子さんが「ことばとお口の教室」を開設した。活動に賛同する歯科医院の休診日に相原さんが出向き、待合室を利用して不定期に開き、勉強会や相談に乗っている。（斉藤和音）

十月上旬の日曜日、大府市で「ことばとお口の健康の日」が開催された。歯の間から舌先が見えていることや、指摘し、舌の筋力が弱く、舌が下がっていることが原因と説明した。相原さんは子ども時代の口元の写真を見せて尋ねた。「口がポカンと開いているのは、唇の筋力が弱いから。三歳を過ぎてもこんな様子なら、気に掛ける。いつも口を開けている。年齢が上がるにつれて、口を開けておく必要がなくなる。年齢が上がるにつれて、口を開けておく必要がなくなる。年齢が上がるにつれて、口を開けておく必要がなくなる。」

話し方が不自然、食べ物をかんでのみ込むことがスムーズにできない、口呼吸をしているなどの症状が当てはまる。自然治癒は難しく、生涯にわたって影響が出る可能性もあるという。背景には、離乳時や幼児期の食習慣などが影響していると考えられている。スマートフォンなどを使う際に猫背の姿勢で下を向くことで、「下あご」が引っ張られ、口が開きやすくなっていることも原因になり得る」と相原さんは指摘する。

病気と診断されれば、口周りの筋力を鍛えたり、食習慣を見直したりして症状の改善を図る。だが、近くに相談できる病院がなかったり、通院する時間がなかったりして、治療や訓練が進まない場合もある。病気について知らない保護者も多い。

相原さんは「口の健康は全身の健康につながる。口腔機能発達不全症について広く知ってもらって早期発見につなげ、家族の不安を少しでも減らせたら」と教室を開設した理由を話す。教室では、病気について学んだ後に個別相談にも応じる。県内外で、教室を開設する歯科医院を募っている。